

鶴見大学創立50周年・鶴見大学短期大学部創立60周年記念

第136回貴重書展示

源氏物語の和歌



平成26年1月23日(木)～2月15日(土)

鶴見大学図書館 エントランスホール

*2月15日(土)：特別講演会・ギャラリートーク

鶴見大学図書館・源氏物語研究所

後援；紫式部学会・武蔵野書院

あけましておめでとう存じます。

毎年新春の貴重書展示は、吉例により源氏物語研究所が担当します。大学創立50周年記念事業の掉尾を飾る催しとして、会期を少し延長、あわせて講演会も行うことになりました（講師の苦吟が目に見えるようです）。どうぞ幾度でもおはこびください。

さて、展示のたびごとに申し上げております通り、当研究所の最大の仕事は、『源氏物語』とそれに関連する分野について、質のよい古典籍を収集し、書物に即した的確で実証的な調査を行うことにあります。華やかに打ち出される言説や、あるいは犀利を装った所謂現代的な議論は、しばし人目を驚かすことはあっても所詮根無し草、すぐに次の流行に取って代わられます。時を超えて学問を支え、豊かな源泉となって研究を潤し続けるものは、古典籍をおいて他に見あたりそうもありません。研究所はこれまで蓄積された蔵書の錦にさらなる花を加えるべく、限られた予算を最大限有効に活用し、目録を眺め回し古書肆を訪ね、検討を重ねて書物を集めます。その結果、学界のみならず一般にもよく知られるところの、本学の優秀な貴重書コレクションが形成されました。

今回は、『源氏物語』の中から、さまざまな和歌を取り上げました。紫式部は物語の中に800首近いやまとうたを織り込んでいますので、歌人としての力量も瞠目すべきものがあります。優雅な巻名は大半が作中の和歌に由来し、女君の呼称もまた、和歌にちなむ例がとて多く、陰影にとむ文章のあちこちには引き歌として古典和歌がちりばめられています。書物を選び解題を書きながら、『源氏物語』と和歌の深い縁を感じた次第です。

では、ごゆっくりとお楽しみください。

平成甲午青陽下浣

源氏物語研究所

高田 一言 敬

*立案・解題は高田の担当です。ご意見・ご感想など、是非お聞かせ下さい。また、図書館の典籍のみでは足りない箇所に個人蔵の資料を提供していただきました。ご協力に感謝します。

源氏物語の和歌

* = 個人蔵

展示目録

I 巻の由来

- 1 蒔絵筆筒入源氏物語 初音 江戸時代前期写 列帖装54冊
- *2 源氏物語絵 野の宮を訪れる光源氏 江戸時代初期制作 軸装1幅
- *3 源氏五十四帖 早蕨 尾形月耕画 明治25年(1892)横山良八刊 1枚
- 4 源氏物語絵 浮舟と薫大将と鷺 室町時代後期写 軸装1幅
(参考) 手枕 寛政4年(1792)永楽屋東四郎刊 袋綴1冊

II 女君の呼び名

- 5 源氏物語歌集断簡 伝花山院師賢筆 松尾切 南北朝時代写 台紙貼1葉
- 6 古活字版源氏物語 花宴 伝嵯峨本 慶長頃(1596~1615)刊 袋綴1冊
- 7 源氏物語絵巻 花散里 天保2年(1831)幽遠斎画 卷子本3軸
(参考)*源氏五十四帖 花散里 尾形月耕画 明治25年(1892)横山良八刊 1枚
- 8 源氏物語 古注釈書入残欠本 江戸時代前期写 来迎寺・村井順旧蔵 袋綴22冊
- 9 源氏物語忍草 天保5年(1834)序 松阪小津桂窓旧蔵 袋綴5冊
(参考) 源氏物語古系図 安養尼本 江戸時代前期写 折本1冊

III 笑いのある歌

- 10 雨夜物語だみことば 安永6年(1777)出雲寺文治郎他刊 袋綴2冊
- 11 源氏百人一首 天保10年(1839)刊 袋綴1冊
- 12 絵入源氏物語 常夏 慶安3年(1650)跋 承応3年(1654)八尾勘兵衛刊 袋綴60冊

IV 男達の歌

- 13 源氏物語 須磨 伝二条為定筆 鎌倉時代末期写 列帖装1冊
- 14 源氏物語 藤裏葉 蒔絵箱入(橋姫・椎本欠) 江戸時代初期写 袋綴52冊
- 15 源氏物語 幻 伝尊証法親王筆 室町時代末期写 列帖装1冊

V 恋のやりとり

- 16 源氏物語 若紫 未装訂升形残欠本 江戸時代初期写 列帖装18冊
- 17 源氏物語抜書 篝火 江戸時代中期写 卷子本1軸
- 18 絵本袖中雛源氏 合羽刷り 江戸時代後期刊 丁子屋源治郎刊 袋綴1冊
- 19 嫁入本源氏物語 夕霧 残欠本 江戸時代前期写 列帖装12冊
- 20 源氏小鏡 明暦3年(1657)安田十兵衛刊 袋綴3冊

解題

I 巻の由来

源氏物語の巻々には、それぞれに優雅で印象的な名前が付けられています。作者紫式部自身の命名であったかどうかは確証のないところですが、多くの巻の名が作中和歌に由来することは、まぎれもない事実。全五十四帖のうち、ざっと数えて三十七帖が和歌によって名前を付けられ、その名前は当該巻全体の趣をなんらかの形で表しているわけですから、源氏物語の外題を眺めるだけでも、歌の重さが実感出来るでしょう。

1 蒔絵筆筒入源氏物語 初音 江戸時代前期写

列帖装54冊

縹色紙地に金泥・金箔を贅沢に用いた下絵装飾表紙（縦23.7、横16.7糎）。左端には押し発装あり。表紙絵は各巻を代表する名場面にちなみ、初音では六条院の新春を豪華に描く。梅の枝に止まった鶯が肥満気味であるのは、ご愛嬌（下図参照）。表紙中央に金泥下絵絹地題簽（縦14.9、横3.0糎）を貼る。「桐つほ」以下「夢のうき橋」の外題は、本文の書写者よりさらに能筆の人物が一貫して揮毫する。見返し、卍繋ぎ艶刷り金紙。本文料紙、厚手の斐紙。

毎半葉10行24字程度を定式とするが、分量の少ない花散里・関屋・篝火は8行書写。墨付き丁数を増して、書物の体裁を整えるための工夫である。まま朱の句読点を施すが、展示の初音巻にはない。蒔絵筆筒と相まって、調度品としても見応えのある美しい典籍。

本文は、青表紙本系の肖柏本・三条西家本に近い。「色つきはしめ」（1オ）の右脇に「そめ」と別筆の書き入れがあるのは、諸本中独自の異文である。伝来途中で綴じ糸が切れ、紫絹糸を用いた綴じ直しがなされた（元糸は紺）。その際、空蟬・夕顔・若紫・関屋・絵合・胡蝶に複雑な錯簡を引き起こしている。



典籍の見事さは勿論、これを収納する蒔絵の書物筆筒もまた、注目すべき資料である。蓋のオモテ・側面・背面に仙翁を主要題材とする秋草金銀泥蒔絵が施され、螺鈿や高蒔絵で『源氏物語』の巻名を書く。天板中央の提鑲や蓋上部の鍵金具にも唐草の彫刻と鍍金が見られる。この筆筒とほぼ同規模・同意匠の歌書筆筒が静嘉堂文庫に存し、両者は共通の蒔絵師達によって作られたのではないかと推測される。仙翁は安土桃山時代から江戸時代初期にかけて好まれた画題であり、漆芸史の専門家は、17世紀後半、大名の息女の輿入れに際して持参したもの、と見ている。

お正月らしい巻を展示した。展示箇所見開き左側に、明石の御方の歌「年月をまつにひかれてふる人にけふ鶯のはつねきかせよ」が見え、巻名の典拠となっている。長い間会え

ないでいる我が子へ明石の御方が贈ったものである。ちなみに室町時代の三条西家は、新年の読書始めに初音巻を用いるのが佳例であった。さらに余計なことを言えば、近衛家では『日本書紀』神代巻、九条家では『栄花物語』月宴を使う。同じく公卿であっても、それぞれの家の違いがおもしろい。

***2 源氏物語絵 野の宮を訪れる光源氏 江戸時代初期制作 軸装1幅**

上方余白に賢木の本文抜書を添え、下方に野の宮を描いた源氏物語絵（縦91.7、横38.8糎）。絵そのものは江戸時代のごく早い頃、あるいは安土桃山時代まで遡りうる。原態は複数の場面を備えた屏風絵もしくは障子絵であったろう。賢木の本文（大成335・336頁）は江戸時代中期の後補と推され、絵1枚毎に鑑賞されるようになってから、本文の書き入れが行われたらしく、墨と料紙とのなじみの悪いところがある。六条御息所の歌第5句「かさしぞ」（諸本「さか木ぞ」）は珍しい異文。

晩秋9月の色づく木々を点綴し、黒木の鳥居と小柴垣が描かれていて、野の宮の図であることは一目瞭然。面貌の描き分けは精細であり、衣紋の書き込みや建築物の線引きも丁寧かつ確かな技量を示す。ただし、処々に落剥や料紙の割れが見られ、残念ながら補筆も少なくない。上方の本文に「さかきをいさゝか折りて…をとめごがあたりとおもへば／さかき／ばの／香を／かぐはしみ／とめて／こそ／おれ」とある通り、榊の枝を画中に描くのが習いとなっている。これを抛り所として巻の名も付けられた。掲出の絵では、顔料こそ落ちてはいるけれども、畳の縁の上に墨書き下絵の痕跡がわずかに残る（右図参照）。



***3 源氏五十四帖 早蕨 尾形月耕画 明治25(1892)年横山良八刊 1枚**

大判の錦絵（印刷面縦32.3、横21.9糎）。宇治の山里で姉大君を追慕する中君、手に阿闍梨への消息を書く料紙が見える。右上の色紙形に「早蕨／このはるは／たれにかみせん／なき人の／かたみにつめる／みねのさわらび」と刷られるのは、阿闍梨が蕨・土筆の籠とともに「君にとてあまたの春をつみしかばつねをわすれぬ初蕨なり」の詠を贈った、その返歌である。渋い色調のうちに再現される物語の情趣、丁寧な描線と構図の新しさは、今日なお魅力を失わない。

尾形月耕（1858～1920）は江戸日本橋生まれの才能豊かな絵師。日本画の他に、陶磁器の下絵や蒔絵意匠までこなし、しかも独学であったのは驚きである。この錦絵は、物語54帖分に目録表題の1枚が加わり、都合55枚。展示はその内の1枚に過ぎない。全揃いは九曜文庫にご所蔵か。九曜文庫（中野幸一博士）は『源氏物語』関連資料の個人収集において空前の質と量を誇り、愛好家には垂涎の的である。

4 源氏物語絵 浮舟と薫大将と鶯 室町時代後期写 軸装1幅

色紙型（縦26.1、横21.5糎）に丁寧な賦彩が施され、久方ぶりに宇治を訪れた薫大将と浮舟が描かれる。繊細な筆致の大和絵である。匂宮に魅せられて心乱れる女は、

身分高い誠実な男を前にして、何を思うのであろうか。左手には寒々とした宇治川の流れ、中州に鷺が止まる。衣紋や面貌の描写も細やかで、静謐な画面を創出している。『源氏物語』本文では「山のかたは霞隔てて、寒き州崎に立てるかささぎの姿も、ところがらはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見わたさるるに」となっており、「かささぎ(鶺鴒)」であって鷺ではない。この絵に鷺が登場するのは、決して絵師の誤解ではなく、中世には「かささぎ」を鷺と解した古注釈や、本文自体を「さぎ」に作るものが存在したからである。江戸時代の挿絵にも鷺を描く例が見られる。

浮舟巻を絵画化する時、当該場面を選ぶかどうか十分な調査をしていないが、『源氏物語絵詞』(旧大阪女子大学蔵)はこの箇所を抄出している。また土佐光起『源氏物語画帖』(京都国立博物館)の総角と構図・人物描写が似ている点も、注意されよう。箱書は仮名古筆研究家・書家として著名な田中塊堂(1896～1976)の手になり、これはこれで典雅な趣を持つ。

絵は宇治の2月初旬、展示期間とも重なるので掲出した。巻の名は「橋の小島の色はかはらじをこの浮舟の行方しられぬ」による。この歌からはまた、女性の名「浮舟」も生まれた。**9源氏物語忍草**参照。

(参考) 手枕 寛政4年(1792)永楽屋東四郎刊

袋綴1冊

縹色布目紙表紙(縦26.2、横18.4糎)左肩に単郭(縦18.4、横3.1糎)の楮紙題簽(縦18.9、横3.7糎)を押し、郭内に「手末久羅」と刷る。紺の角裂あり。原装・原題簽に加え、「本居大人文／手枕」と印刷した保存状態良好の袋が添えられている点、書誌学資料としておもしろい。南園文庫より当館へ寄贈。

本文は四周単辺(縦19.8、横14.3糎)9行22字程度、漢字平仮名交じり。濁点・句読点(.)を付刻する。版心「○手まくら ○一(～十四)」。料紙、楮。14ウ7行目まで本文、以下引歌を示す自注・寛政4(1792)年春の大館高門(1766～1839)跋があって、「版元尾張名古屋本町通七丁目 永楽屋東四郎」と刻す。さらに『古事記伝』～『玉勝間』に至る永楽屋の広告11丁を付し、ウラ見返しに「京都御幸町通姉小路上ル 菱屋孫兵衛」以下「永楽屋東四郎」に至る13書肆の名を掲げる。永楽屋は京・大坂・江戸以外の地にあつて大いに気を吐いた書肆であり、宣長の著述の殆どを出版した。版面の印象・使用料紙の状態等から、明治刷りと判断される。巻首に「魯亥」の緑泥印。

六条御息所と光源氏との「はじめの御事」が見えないので、本居宣長(1730～1801)が、『源氏物語』の文体に倣いその間の事情を創作したもの。『手枕』の題号は、六条御息所に贈った「かはすまもはかなき夢のたまくらになごりかす／める春の夜の月」(光源氏)の歌に基づく。宣長は、多くの巻名が作中和歌に由来する慣例を真面目に守り、自作にも典拠となる和歌を詠み入れたのである。さらに律儀なことには、どの箇所につき歌があるか4箇所についての自注を付しており、なるほど学者の書いた物語、と納得出来る。展示箇所見開き左面に、題号の拠り所となった「かはすまも」の歌を含む贈答がある。

II 女君の呼び名

優艶な、あるいは可憐な女君たち—時に笑われ役も登場します—の名前もまた、和歌によるところが大きいと言えるでしょう。後世の読者の付けたものも少なくありませんが、登場する女性の多くについては、それぞれ詠んだ歌にちなみ、親しみをこめて呼んでいます。逆に、和歌のこぼで命名される男公達がとても少ないのは、おもしろいことです。

5 源氏物語歌集断簡 伝花山院師賢筆 松尾切 南北朝時代写 台紙貼1葉

斐楮混漉き料紙（縦26.9、横9.4糎）に4行書写。水辺・菖蒲を描いた金泥下絵は文字を避けて描き込まれ、古筆切の価値を高めるために行われた後人の作為である。和歌1首1行、その末尾を折り返し書き。詞書は和歌より3字程度下げる。右端に料紙の変色が見られ、かつ削去と覚しき荒れも認められるので、おそらく1行分を磨り消したのであろう。これも古筆切の見栄えを良くするためにしばしば行われた。原態は大型の卷子本。

古筆了音（1674～1725）の極札「尹大納言師賢卿／うつせみの〔琴山〕」（オモチ）・「切癸巳四 〔了音〕」（ウラ）を添える。「癸巳」は正徳3年（1713）であろう。伝称筆者花山院師賢（1301～1332）の手とは言えないが、さほど下の時代のものではない。物語の断簡としては珍しく「松尾切」の特別な名を持ち、重要視された古筆切。久曾神昇『源氏物語断簡集成』に収録された1葉、極札右下の「松尾切」は久曾神博士の書き入れと思われる。

物語中から和歌を抜き出す鑑賞法は古く平安時代に遡り、「源氏集」と呼ばれた例が知られている。多種多様の源氏物語歌集には、和歌とその作者名のみを掲げた簡略な書物もあるが、掲出の松尾切の場合、詞書の形式で物語の状況を要約し全体の筋をある程度追うことが出来るので、梗概書の役割も果たす。「うつせみのはにおく露のこがくれてしのびしのびにぬるゝ袖かな」の歌と薄衣を残して源氏から逃れたことにより、伊予介の後妻は「空蟬」と呼ばれる。華やかな容貌の美しさはないけれども、控え目で芯の強い人柄が印象的である。

6 古活字版源氏物語 花宴 伝嵯峨本 慶長頃(1596～1615)刊 袋綴1冊

香色無地具引斐紙表紙（縦27.2、横22.0糎）中央に雲母刷り下絵題簽（縦18.2、横2.9糎）を押し、「花宴」と刷る。その右下に「八」と細字墨書、巻序を示す（次頁図版参照）。押発装あり。高雅な意匠の原装をそのまま伝える、古活字版の優品である。見返し、本文共紙。墨付き10丁、毎半葉11行22字程度（印刷面縦約22.5、横16.5糎）、連続活字を使用し、本阿弥光悦（1558～1637）の書風に倣った闊達な版面は印象的。本文料紙、楮。朱の書き入れ（頭注・傍注合点・読点など）を施す。巻首に「臨野堂文庫」「瀬能／蔵書」の蔵書印あり、前田夏蔭門下の国学者で長州藩に出仕した瀬能正路（1807～1870）の旧蔵。「飯山／宮／之印」は、長門国飯山八幡宮であろう。

51冊のまとまりとして昭和50年（1975）東京古典会主催入札会に出品された後、散り散りとなるが、当研究所の収集の結果、13帖（花宴・花散里・松風・朝顔・螢・篝

火・野分・横笛・夕霧・御法・紅梅・浮舟・蜻蛉)を集めることができた。すべて原表紙



・原題簽の美本である。ただし近年、当該伝嵯峨本を始め古活字版の価格が極めて高いものとなっており、これから何冊集められるか心許ない次第である。本学には、上記13帖の他、ツレではない伝嵯峨本2帖(朝顔・真木柱)と寛永頃刊の古活字版『源氏物語』(2冊補配)を所蔵する。

『源氏物語』に限らず、文学作品の古活字版は、本文上も享受史上も極めて重要であり、古写本に準ずる、時としてそれを凌ぐ価値を持つので、今後の解明に期待するところが非常に大きい。

展示箇所は朧月夜が古歌を口ずさみながら登場するところ、弘徽殿細殿の名場面。見開き右面2行目に「おぼろつきよににる物ぞなきとうちずして」と見える。女君の名は引用された和歌による。

7 源氏物語絵巻 花散里 天保2年(1831)幽遠斎画 卷子本3軸

楮紙(縦28.6、横約38.0糎)を上中下巻それぞれ13紙・20紙・21紙継ぎ。1紙を1巻に宛て1図を描き、都合54図。ただし橋姫巻は2図あり、椎本巻の分を欠く。当館には継紙の形で入り、朽葉色表紙・軸・題簽等を加えて現在の状態となった。題簽は貞政少登先生(本学名誉教授・元独立書人団理事長)のご揮毫。

上巻冒頭に厚手楮紙(幅約5糎)を加え、「源氏五十四帖 探幽」と墨書する。この部分は汚れ・手沢が目立つので、元表紙の一部か端裏書を張り継いだと推される。続いて遠幽斎の識語「五十四帖／引歌／山路露／系図／爪印上／同 中／同 下／以上六十帖／探幽法印筆／天保二卯年十月中旬／幽遠斎写」。本文54帖に引歌以下6帖を加えた60帖仕立ては、**12絵入源氏物語 慶安3年(1650)跋 承応3年(1654)刊 袋綴60冊**に相当する。確かに絵柄がほぼ一致し、慶安3年跋絵入源氏物語の広汎な影響から見ても、掲出の絵巻の典拠はそれであろう。しかし狩野探幽(1602~1674)の原図に基づく証拠はなく、絵師幽遠斎に関しても『椿図』(都立中央図書館加賀文庫)以外の作例は知られていない。

とは言え、版本の大和絵風描写を狩野派得意の漢画的筆致としたり、縦長の原図を横幅の広い画面に組み替えたり、時には左右を反転させて新味を演出したりと、様々な工夫が凝らされている。瀟洒な淡彩も嫌みがなく美しい。

花散里の巻名となった「橘の香をなつかしみ時鳥花ちる里をたづねてぞとふ」を光源氏が麗景殿女御に詠みかける。几帳を隔てて座るのが女御、源氏の愛人花散里の姉である。展示箇所では、約束通り右上の曇り空に時鳥が描かれる。

(参考)*源氏五十四帖 花散里 尾形月耕画 明治25(1892)年横山良八刊 1枚

手前に女君、奥の妻戸前に光源氏を登場させる。明るい画面だが、物語では夜の設定。**3源氏五十四帖 早蕨**のツレ。**7源氏物語絵巻**が花散里の姉麗景殿女御と光源氏の対座であるのに比べ、「にしおもて」に住む花散里を大きく描き出して一場の恋愛劇とするところが特色である。全体の構図は、寝殿と西の対を意図したものであろう。

色紙形に「花散里／たちばなの香を／なつかしみ／ほとゝぎす／はなちる里に／たづねてぞ／とふ」の和歌が見え、第4句「はなちる里に」の本文は他に例のないもので、版下

の誤りか。花散里は華やかな容姿を備えているわけではないが、人柄のよさを源氏は高く評価、夕霧・玉鬘の養い親とした。絵の右上、鳴き渡る時鳥が洒落たアクセントとなっている。

8 源氏物語 古注釈書入残欠本 江戸時代前期写 来迎寺・村井順旧蔵 袋綴22冊

朽葉色地に石畳文様を空押しした紙表紙（縦27.3、横19.1糎）中央に銀泥・銀箔装飾斐紙題簽（縦9.1、横3.2糎）を押し、巻名を墨書。題簽落剥の場合は、その位置に打ち付け書きとする。虫損補修にあたり天地・ノドの部分若干を切り詰め、判読困難な箇所が生じた。見返し、本文共紙。各巻冒頭に遊紙一枚を置き、巻名に由来・年立等を注記する。本文料紙、楮。遊紙オモテに「来迎寺」「村井氏／蔵書」の印。前者については同名の寺院が多く未勘、気品高い印影から見て由緒ある名刹と思われる。後者は村井順博士の所用。

本文、毎半葉10行20字程度。行間を比較的大きく取って書写するのは、注の書き入れを前提としたからか。本文同筆と覚しき朱・墨の書き入れ。特に墨書き入れは詳しく、全冊に及ぶ。ただし、葵巻の分は『紹巴抄』とほぼ一致するが、他の巻では『万水一露』の永閑・宗碩説を引くなど、どのような古注釈に依拠したのかは、まだ特定出来ていない。

葵・蓬生・関屋（蓬生と合冊）・松風・絵合・薄雲・朝顔・乙女・玉鬘・初音・螢・常夏（螢と合冊）・篝火・野分（篝火と合冊）・行幸・藤袴（行幸と合冊）・楨柱・梅枝・藤裏葉・若菜上・若菜下・柏木・夕霧・竹河・橋姫・椎本の22冊26帖分存。江戸時代前期の写しであろう。蒔絵箱は、蓋を失っているものの、安土桃山時代の遺風を感じさせるおおらかな作行き。

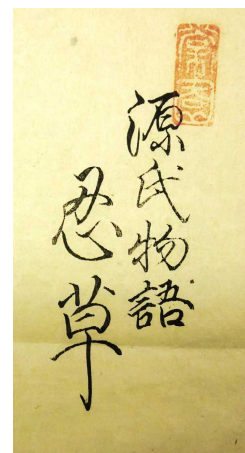
柏木に降嫁した朱雀院第二皇女は、母が更衣であるために「落葉」と軽んじられる。夫は光源氏の正妻女三宮と密通事件を起こし、ついに亡くなってしまいが、その後友人夕霧は柏木の未亡人落葉宮に熱を上げる皮肉な展開となる。展示箇所見開き右面1行目、「もろかづらおちばをなにゝひろひけん名／はむつまじきかざしなれども」の柏木独詠歌が見え、「落葉宮」の名はこれによる。

9 源氏物語忍草 天保5年(1834)序 松阪小津桂窓旧蔵

袋綴5冊

檀紙風の凹凸ある赤香色紙表紙（縦25.9、横18.3糎）は原装。中央に灰青色題簽（縦17.5、横3.0糎）を押し、「源氏物語忍草 一（～五）」と刻す。表紙に濃緑色の忍草（齒朶）を刷るのは、勿論作品名との関わりによる。海松色角裂・紫の綴糸・「源氏物語／忍草」の袋（右図版参照）も調製時のままと伝える。凝った造本から見て、私家版か。各冊巻頭に遊紙1枚を添えるのも、ちょっとした贅沢と言えよう。保存良好の美本である。無郭、毎半葉10行27字前後。版心「○（丁付）」。漢字平仮名交じり、平仮名傍訓・句読点あり。

各冊巻頭の「小津氏家／蔵図書印」「南勢松／阪小津／図書印」は、小津桂窓（1804～1858）所用。桂窓は伊勢松阪の豪商小津家の当主であり、国学者・文人・蔵書家としても有名であった。曲亭馬琴（1767～18



48) との交流は文学史上に著聞する。

掲出本は、北村湖春(1648~1697)が『源氏物語』を5巻に要約・梗概化、天保5年(1834)頃の出版。跋文によれば医師「尾上氏の何某」の依頼が機縁となって作られた。あらすじの纏め方は的確、文章も自然な流れを持っており、物語の入門書として現在なお好適なものの一つである。序文を成島司直(東岳、1778~1862)が、跋文を坂昌成(?~1842)が書く。司直は奥儒者、昌成は連歌師として幕府に仕えているので、有力大名家で出版されたかとも臆測するが、詳細不明。成立より150年ほど経過して刊行された理由もよくわからない。

展示箇所は巻5、見開き左面3行目に「御かへし。浮舟／橘の小じまは色もかはらねど此うき舟ぞゆくゑしられぬ」とあり、ここから二人の男性の間で悩む女性浮舟の名が付けられた。

(参考) 源氏物語古系図 安養尼本 江戸時代前期写 折本1冊

卍繋ぎ艶刷りの丹表紙(縦17.7、横11.4糎)左端に押し発装、外題なし。見返し本文共紙。本文料紙、ごく薄く雲母を引いた斐紙。全24折のうち、墨付23折。「太上天皇」より始まり、「参議惟光」までを三段に書写。朱の系図線・圈点を施す。紙背には『源氏物語』の巻名を掲げる。

掲出本は、三条西実隆(1455~1537)の編集した系図が流布する以前の所謂古系図であり、24系87名を載せる。他本と比較するに安養尼本古系図と判断され、書誌的な脱落ではなく末尾を書き落としたらしい。あるいは親本段階で既に欠脱があったか。常磐井和子「安養尼本源氏物語古系図」(『古代文学論叢』3)とよく一致する。

宇治八宮の落とし胤で常陸介の継娘となった女君は、通常浮舟と呼ばれる。この名前は平安時代以来の由緒を誇るが、「手習の君」と称されることも多かった。手習巻「なほあさましくものはかなかりけると、我ながらくちをしければ、手習ひに、身をなげし涙の川のはやき瀬をしがらみかけてたれかとどめし」の行文から付けられたもの。見開き面中段左端に「手習三君／御はゝひたちのかみの」と注記された部分を展示する。

III 笑いのある歌

やまとうたは格調高く奥深いもの、とは限りません。機知・洒落・冗談・皮肉、そして理知的な洞察までも包み込むところに、古典和歌の豊かさがあります。権威ある勅撰集には笑いを誘う例が多く含まれていますし、源氏物語にも吹き出したくなるような和歌が見られます。紫式部の創り出す世界は幅広く、けっしてお涙頂戴だけの作品ではないのです。

10 雨夜物語だみことば 安永6年(1777)出雲寺文治郎他刊 袋綴2冊

縹色布目紙表紙(縦27.6、横19.5糎)中央に薄黄色楮紙題簽(縦18.3、横4.0糎)を押し、「雨夜物語だみこと葉 上(下)」と刻す。見返し、本文共紙。本文料紙、楮。上巻は、序(上田秋成・加藤宇万伎)4丁と附言2丁あって、本文29丁。下巻は本文23丁、後見返しに刊記「安永六丁酉年初夏 出雲寺文治郎／風月庄左衛門／吉

田四郎右衛門／梅村三郎兵衛」。刷りのよい本である。

序・附言は無郭、本文は四周単辺（縦21.4、横15.2糎）、その上部に頭注のための棚（幅6.0糎）を設ける。版心は魚尾に「雨 上之一（～下之卅三終）」。本文には、四角枠を本行に刻し補うと分かりやすくなる語句を記し、口語体に近い傍注あり。附言に「賀茂の翁あらたに注をかき出してあげつらはれしことどもあり。いまもはらその注により」と述べる通り、賀茂真淵（1697～1769）の『源氏物語新釈』を用いて注解する。帯木巻のみを対象とする注は、室町時代より作られているが、掲出本は最も詳細なものの一つである。加藤宇万伎（1721～1777）は幕府大番与力で歌人・学者として令名が高かった。序文を書いた上田秋成（1734～1809）は国学の弟子である。

展示箇所は、帯木巻の笑い話。式部丞の経験談に登場する大変な才女は、「なまなまの博士はづかし」と紹介されるだけあって、風邪を引いた時の対応も極めて合理的である。すなわち蒜（ニンニクの類）を「極熱の草薬」として服用、その匂いにたじたじとなった式部丞が「さゝがにのふるまひしるき夕ぐれにひるますぐせといふがあやなき」（見開き右面4行目）と詠めば、才女は「逢ふことのよをしへだてぬ中ならばひるまもなにかまばゆからまし」（見開き左面1行目）と応酬する。

11 源氏物語百人一首 天保10年(1839)刊

袋綴1冊

薄藍色無地紙表紙（縦26.0、横17.9糎）の左肩に朱地題簽を押すが、現在その下半分（縦約10.0、横4.5糎）のみ残り、子持ち枠内に「首 完」の文字が見える。見返し、本文共紙。ここに4周単辺（縦20.6、横15.0糎）を刷り、「黒沢翁満大人著／源氏百人一首 完／江戸書林 千鍾房 金花堂 玉山堂 合刻」と3行に刻す。天保9年（1838）橘守部序（2丁）・天保11年前田夏蔭序（2丁）・藤原定良序（2丁）・翁満の「惣論」（8丁）、以下桐壺帝から小野尼まで123人の姿絵と和歌を載せ、頭注形式で各人物の略伝を記す。人物の配列は物語の登場順であり、略伝によって『源氏物語』の大要を把握することも可能な、便利で楽しい入門書と言えよう。武州忍藩の重臣、才気溢れる国学者黒沢翁満（1795?～1859）の著。

守部序は4周単辺（縦19.9、横14.8糎）、夏蔭序と定良序は無郭、「惣論」以下は4周単辺（縦20.6、横14.8糎）。版心「源氏一首 惣論一（八）」の如し。最終丁（62丁）オモテまで本文、ウラに「天保十年己亥十二月発行／松軒田靖書／椿齋清福画／玉山堂梓」の刊記があるけれども、成立・出版については問題が多い。末尾に「黒沢翁満先生著述目録」2丁を付す。余談ながら、そこに書名が見える「童話長編」は、是非一読をお勧めしたい極上の戯文である。

前引の刊記に従えば、天保10年の出版となるが、後見返しに「天保十二辛丑年正月／発行書林」として岡田屋嘉七以下8名の書肆が見え、2年遅れた天保12年の印行と推される。刷りは更に下がるか。序文を検すると、守部序は天保9年8月、夏蔭序は天保11年5月、定良序は同年11月の年紀だから、天保10年に出版されようがないのである。ちなみに3つ目の序文を書いた人物は木村定美とされているけれども、筆跡から木村定良（1781～1846）ではないだろうか。

序と刊記と後ろ見返しの提起する問題も重要だが、これまで注意されてこなかった図版の改刻も極めて不可思議な現象である。掲出の版は、刷りが下がるにせよ、初刻と判断さ

れるが、頭部のみ彫り改めた後出の別版が存し、両者は眼が細い（初刻）か見開いている（改刻）かで、容易に区別がつく。登場する123人の面貌を全て彫り改めたのであるから、非常な労力を要したと推されるが、その間の事情は不明。

展示箇所見開き左側に、常陸宮の姫君末摘花と「から衣君が心のつらければ袂はかくぞ



そばちつゝのみ」の散らし書きが見える。身分は高いものの、胴長で赤鼻、時代遅れの趣味と機転の利かなさが、読者の笑いを誘う。「から衣」を口癖のように詠み込み、源氏から皮肉られるけれども、一向に改まらない。しかし掲出本では、毘沙門亀甲の几帳の脇でなかなかの美形として描かれる（左図参照）。末摘花は絵師に十分感謝してよいであろう。

12 絵入源氏物語 常夏 慶安3年(1650)跋 承応3年(1654)刊 袋綴60冊

紺色無地紙表紙（縦27.0、横18.2糎）の中央に間合紙題簽（縦16.7、横3.4糎）を貼り、「とこ夏／玉かつら并四／歌と詞を名とせり」と刻す。押発装あり。見返し本文共紙。本文料紙、楮。朱の綴糸も原態を留めるか。保存良好の美本。本文は無郭、每半葉11行21字程度（印刷面縦約20.5、横15.5糎）、漢字平仮名交じりとし、濁点・句読点・振り仮名・簡単な傍注を付す。後述の挿絵と相まって、親しみやすい書物となっている。丁のオモテ面ノドの部分に巻序と丁数を刻し、巻序はイロハを用いる。したがって常夏巻は「ノ」（26番目）。

絵は片面半葉と見開きの両様あり、4周単辺（縦18.7、横14.5糎）内に山本春正（1610～1682）の大和絵風挿絵。春正は当時著名の蒔絵師であり、歌人・古典学者としても聞こえていた。掲出本の他、『古今類句』36冊の刊行も行っているので、知力のみならず相当の財力も備えていたのであろう。この絵入本出版後、版本のみならず写本・絵巻の類にまでその影響は大きく及んだ。

近江の君が五節の君と双六を打つところを展示した。近江の君は、さすがに内大臣の娘だけあって容姿はわるくない。しかし落ち着きのない極めつきの早口、各地の歌枕を1首に詠み込み、「紅といふものいと赤らかにかいつけて」異母姉のところへ参上する。父内大臣さえ「ものむつかしきをりは、近江の君見るこそよろづまぎるれ」（行幸）と「笑ひ草」にするほど、戯画化された姫君である。見開き左面に双六盤をはさんで対極する二人のうち、奥が近江の君であろうか。

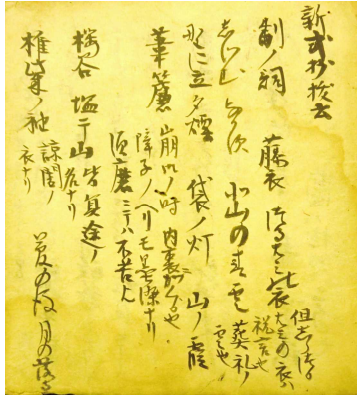
IV 男達の歌

源氏物語に多数の和歌を残した人、つまり作中の大歌人は誰でしょうか。勿論、主人公光源氏であり、221首の歌を詠んでいます。以下、薫57首・夕霧39首・匂宮24首・頭中将16首、この5名で全体の半分ほどを作っていますから、紫上の23首と比べてみれば、なるほど光源氏の物語であると納得し、また男性の歌の多さに驚かれもするでしょう。

13 源氏物語 須磨 伝二条為定筆 鎌倉時代末期写

列帖装1冊

薄萌葱地に草花文様を織り出した緞子表紙（縦15.8、横15.0糎）。左肩に、金泥菊水文を刷り、金霞引きを施した斐紙題簽（縦11.7、横2.9糎）を押し、定家様にて「須磨 為定筆」と墨書。桐箱蓋表に「二条家為定卿筆／須磨巻／新式抄／外題冷泉殿筆」とある通り、題簽筆者は江戸時代後期の冷泉家の誰かであろう。見返し、縹色地に金銀箔散らし。改装後補。



本文料紙、斐。本文は每半葉10行16字前後、漢字平仮名交じり、和歌1首2字下げ2行書とし、その末尾は地の文へ続く。数手による朱・墨の書き入れあり。伝称筆者二条為定（1293～1360）の筆跡かどうか確かめられないが、大略その時代の書写。本文4括り墨付56丁。巻末に遊紙6枚、うち3枚に「新式抜書」を写す。室町時代初期の別筆、断片的なものではあるけれども、『連歌新式』（応安新式）の最古資料に数えられよう（左図参照）。本文は青表紙本系統の肖拍本・三条西家本に近似する。後見返し右下に「弘文荘」の朱印。

見開き右面最終行から「はつかりは恋しき人のつらなれや／たびのそらとぶ／こゑのかなしき」（光源氏）・「かきつらねむかしの事ぞおもほゆる／かりはそのよのともならねども」（良清）・「心からとこよをすてなくかりを／くものよそにも思ひける哉」（惟光）・「とこよいで／たびのそらなるかりなれど／つらにをくれぬほどぞなぐさむ」（右近将監）と、男性4人の詠が見え、流離の地で歌に失意を慰める。主従の和歌は、大きな身分の差をも越えるかの如くである。

14 源氏物語 藤裏葉 蒔絵箱入(橋姫・椎本欠) 江戸時代初期写

袋綴52冊

紺色地に紗綾形・草花を艶刷りした紙表紙（縦25.5、横18.3糎）、左端に押発装あり。表紙中央上部に金銀泥下絵斐紙題簽（縦12.5、横2.2糎）を貼り、「きりつほ」より「夢のうきはし」まで墨書、本文とは別筆である。綴じ糸、朱。橋姫・椎本の2帖を欠くのは惜しいが、原装のまま伝わったことは価値が高い。奥書・識語等なし。本文は数手による寄合書。いずれの筆跡も近衛流を学んだか。装丁・筆跡共に江戸時代初期の闊達な風趣を備える。虫損・擦れ等が見られるものの、概ね保存良好。

見返し、本文共紙を原則とするが、まま後補の楮紙を用いる。各冊巻頭に遊紙1枚を置き、次丁オモテより每半葉10行24字程度に書写、朱の傍注・校合・句読点を施す。校合は巻に依って繁簡がある。東屋巻「むかひておはせしさまいかばかりならん人か宮をばけち奉らんなど」（大成1817頁）は、青表紙本・河内本いずれも「むかひておはするさま」を欠き、別本に「いかなるにかあらむ、むかひておはせしかば」以下の長大な異文があるので、特異な本文として注目される。なお掲出本には当該箇所付箋が押され、朱にて別本に一致する本文を3行引用しているので、校合者は別本を見ていたと推される。

「太上天皇になずらふ御位」を得た光源氏の六条院へ、今上（冷泉）帝の行幸があった。神無月下旬、朱雀院も渡られ盛大な行事が始まり、源氏・太政大臣（頭中将）・朱雀院・今上帝の和歌が並ぶ。展示箇所の見開き左面4行目「色まさるまがきのきくもおりおりに

袖うちかけし／秋をこふらし」(光源氏)と8行目「紫の雲にまがへる菊の花にごりなき世のほしかと／ぞ見る」(太政大臣)の2首、次の丁ウラに朱雀院・今上帝の贈答がある。

15 源氏物語 幻 伝尊証法親王筆 室町時代末期写

列帖装1冊

濃紺地に瑞鳥・唐草等を艶刷りした紙表紙(縦26.0、横18.2糎)、押笈装の痕跡は見えない。刷り文様が薄れた表紙中央に金銀泥下絵斐紙題簽(縦15.1、横3.2糎)を貼り、「幻」と墨書。外題は本文と別筆である。見返し、本文共紙。本文料紙、斐。巻頭に遊紙1枚を置き、次丁オモテより書き始め墨付25丁ウラ1行目まで、每半葉10行20字程度に書写する。巻末に遊紙2丁、3括り都合28丁。綴糸は緑太絹。和歌2字下げ2行書、その末尾は地の文に直接続く。朱の合点・読点(行の中央)あり。合点は引歌相当箇所へ施す。本文は青表紙本の三条西家本・肖拍本に類する。

見返しに楮紙片(縦11.5、横3.4糎)を押し、「源氏之巻 尊証法親王御筆／式卷之内」と墨書、本文・外題のいずれとも別筆。かつて掲出本と「式卷」一括であった僚卷の行方はわからない。伝称筆者尊証法親王(1651～1694)は後水尾天皇(1596～1680)の皇子、母は新広義門院国子。承応2年(1653)青蓮院門跡を相続し、寛文9年(1669)天台座主、能書の誉れが高かった。法親王の筆跡資料を多く見ていないので掲出本の筆者か否か判断し難いが、一時代古いと思われる。大ぶりの書型や凝った題簽、本文の闊達な書風から判断して、格式高い家のお輿入れ道具か。

紫上を失った光源氏は、人生の閉じ方を考える。展示箇所は幻巻末尾、長らく導師を勤めた老法師との静かな贈答である。見開き右面に「春までのいのちもしらず雪のうちに／色づく梅をけふかざしてん」(導師)と「千世の春みるべき花といのりをきて／わが身ぞ雪とともにふりぬる」(源氏)の歌。左面には「物おもふとすぐる月日もしらぬまにとし／もわが世もけふやつきぬる」(源氏)の独詠、これが光源氏最後の和歌となった。

V 恋のやりとり

和歌がもっとも活躍するのは、言うまでもなく恋の場面です。花紅葉の枝に結びつけ趣向を凝らして思う人のところへ送る、御簾ごしに直接歌を詠みかける、古歌の引用に人柄を偲ぶ、ひたむきな求愛に対し揶揄して切り返す、など、物語の様々な恋愛模様を歌が効果的に彩っています。

16 源氏物語 若紫 未装訂升形残欠本 江戸時代初期写

列帖装18冊

本格的な装丁を施す直前の状態で伝来。本文左右のやや広い余白や、天地の不揃いは化粧裁ちしていないゆえであろう。本文共紙表紙(縦15.3、横16.0)左肩に「きりつほ」以下「夢のうきはし」の外題を打付書。表紙が付けられれば、当然見えなくなる。まま料紙の左右端に漢数字の書き入れがあり。これは括りと丁数を示し、製本時に裁ち落とされる部分である。本文・外題とも一筆。見返し、本文共紙。本文料紙、斐。虫損若干。表紙右下に「一(五十四)」の記入があるのは、古書肆の心覚えか。

各冊巻頭に遊紙一枚を置き、次丁オモテより書写。每半葉10行11字程度に書写、巻が進むほど字詰め増え、夢浮橋では14字前後となる。漢字平仮名交じり、和歌1首1字

下げ2行書き、その末尾は地の文へ続く。奥書・書き入れ等なし。桐壺・帚木・若紫・末摘花・葵・明石・玉鬘・初音・若菜下・御法・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・蜻蛉・夢浮橋の18帖存。

掲出本は「わかむらさき」と巻名を墨書し、遊紙前後に各1丁、墨付き85丁。本文は上品な能書で、古い典籍の面影を伝えているかの如く見える。中世のしかるべき写本に基づいたか。本文系統は、全体として青表紙本の三条西家本に近いが、なお精査を要する。

藤壺との痛切な受け答えが述べられるところを展示した。光源氏の生涯を方向付けた運命の恋である。見開き右面5行目から「みてもまた逢夜まれ／なる夢のうちにやがてま／ぎるゝ我身ともがな」（光源氏）・「世がたりに人やつたへんた／ぐひなくうき身をさめぬ／夢になしても」（藤壺）の和歌が見える。1首3行書きは比較的珍しい。

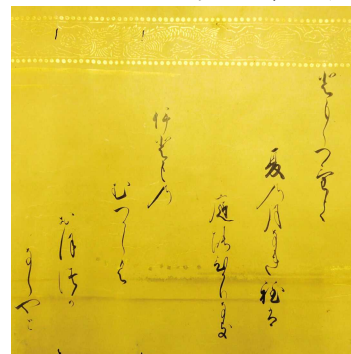
17 源氏物語抜書 篝火 江戸時代中期写

卷子本1軸

濃緑色地に牡丹唐草を織り出した金襴表紙（縦30.9、横30.4糎）、発装は銅を削ぎ竹のように成形したものを使用。紫紐の痕跡を残す。見返し、間合紙に金泥・金箔装飾。本文料紙、斐。料紙上方に金龍文様を刷り、その下に金泥・金箔の下絵を施す。象牙軸を用いた装飾性の高い美麗大型卷子本である（右下図版は本文の末尾）。内題「かゝりひ」（巻首）。1紙（横寸法約49糎）14行程度のゆったりした散らし書きであり、能書の公卿に依頼した調度手本かと思われる。料紙9巻継ぎ、礼紙（横寸法約28糎）1枚を介して軸に付く。

篝火巻を半分ほど書写（大成836頁10行目まで）。本文最終紙は末尾部分に不自然な痛みがあり、他の料紙継ぎ目に張り直しの痕跡を残していることとあわせ考えて、1紙以上の脱落が想定される。少なくとも巻名由来の「篝火にたちそふ恋のけぶりこそよにはたえせぬ炎なりけれ」までは写されていたのであろう。本文は青表紙本系統。

夕顔の遺児への恋情押さえがたく、しかし包容力と節度の備わった態度で若い玉鬘に向きあう。篝火巻前後には、奔放な恋愛とは別種の趣を湛えた巻々が続く。掲出本に和歌は脱落しているが、料紙の見事さを愛でて展示する。当館に収蔵されてから初めてのお目見えである。



18 絵本袖中雛源氏 合羽刷り 江戸時代後期刊 丁子屋源治郎刊

袋綴1冊

縹色地に鍬泥霞引き・菊の下絵を施した紙表紙（縦11.3、横8.3糎）は原装。中央に香色題簽（縦8.5、横2.3糎）を押し、4重の郭内に「絵本／袖中 ^{ひいなげんじ} 雛源氏 全」と刷る。本文に入隅子持ち枠を使用、刊記を除く全ての丁に多色刷りするなど、凝った意匠の掌中本である。見返し、本文共紙。本文料紙、やや厚手の楮。巻頭に序（1丁）・源氏香之図（2丁）あって、第4丁より『源氏物語』各帖の代表的な場面と和歌1首を半丁にまとめ、54帖分27丁の本文。掲出本は淡墨の本文に赤・黄・緑・灰等の彩色。色版は合羽刷り（型紙を用いたステンシル風印刷法）であるが、墨単色版が別に存在する。当館所蔵の両版を比較すると、酷似するものの、彩色版が先行し単色版は巧妙な覆刻であろう。同一版木を襲用する丁（序・第4～6・10丁など）も見られる。

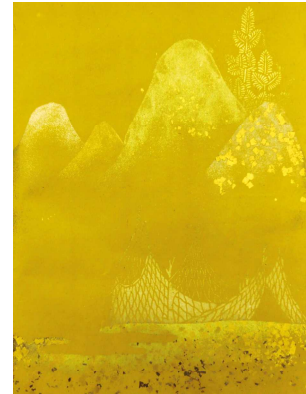
後ろ見返しに跋と刊記「山路の露壺冊かほる大将うきふねの君の／事をのちの人書そへたる也…右絵抄五十四卷也此六卷をそへて／源氏六十帖といふなり／丁字屋源治郎」。ここから判断すれば、**12 絵入源氏物語**に依拠したかと推されるが、絵柄の一致しない巻も多いので、彩色版・単色版の問題を含め、制作事情については今後の詮索に待つ。

向かって右上部に「野分 風さはぎ／むら雲／まよふ／ゆふべ／にも／わするゝ／まなく／わすられぬ／きみ」の散らし書き、幼なじみの恋人雲居雁へ届けられたのであろう。右下に垣間見する夕霧が描かれ、和歌の詠まれた場面ではない。第2句「むら雲まよふ」は諸本多く「まがふ」に作るので、依拠本文を考える材料となる。

19 嫁入本源氏物語 夕霧 残欠本 江戸時代前期写 列帖装12冊

紺地に秋草・土坡等の金泥下絵紙表紙（縦24.0、横18.0糎）、その中央に白具引き金泥下絵題簽（縦12.8、横2.8糎）を押し「ゆふ霧」と墨書、本文の雄渾な書風とは別の定家様である。墨付78丁、遊紙前後に各1丁。この時期の装飾性豊かな書物にしては珍しく押し発装丁が見えない。

絵合・松風・藤袴・梅枝・藤裏葉・夕霧・御法・幻・橋姫・宿木・東屋・手習の12帖存。表紙の下絵は巻之内容と対応せず、いくつかの組み合わせで制作されたらしく、藤袴と幻、夕霧と東屋はそれぞれ同一意匠。多くは青表紙本系統だが、手習巻は河内本の特徴を示す。掲出本は表紙絵や題簽も立派であるけれども、それ以上に見返し装飾の見事さは特筆されよう。鮮やかな黄檗色地に斬新秀抜な画面を作り出す金銀箔が冴え、その意匠性は安土桃山の気風を感じさせる（右図参照）。



展示箇所右面で、「山ざとのあはれをそふる夕霧にたち出／ん空もなき心ちして」（夕霧）の恋情を訴える男の歌に対し、「やまがつのまがきをこめて立きりも心そらなる人はとゞめず」（落葉宮）と女性は受け流す。落葉宮については、**8源氏物語古注釈書入残欠本**参照。

20 源氏小鏡 明暦3年(1657)安田十兵衛刊 袋綴3冊

藍色無地紙表紙（縦27.2、横19.5糎）左肩に素紙題簽（縦18.2、横2.9糎）を押し、子持枠内に「絵入／源氏小鏡 上（中・下）」と刻す。原表紙・原題簽を伝えるけれども全体に疲れが見え、中冊は題簽落剥。見返し、本文共紙。内題本文に匡郭なく、毎半葉13行22字程度。版心文字なし。挿絵は4周単辺（縦21.5糎、横不定）とし、各画面に3行前後の本文を伴うところ、半丁1面単位を定式とする通常の絵入版本と異なる。このような形式を採用した理由は未勘。下冊末尾に「明暦三年丁酉仲秋吉辰／洛陽誓願時前／安田十兵衛開板」の刊記。伝本の多い『源氏小鏡』中挿絵を持つ最も古い版であり、古雅な味わいの書物として珍重される。

見開き左面最終行に、薫大将が浮舟に送った「法のしとたづぬるみちをしるべにて／おもはぬ山にふみまどふかな」の歌が見え、左面には小野の里の図。薫の手紙を届ける浮舟の異母弟小君や女房が登場している。浮舟は既に尼となり、返事をしたためることはなかった。薫の詠は『源氏物語』最後の和歌でもある。